

さとやま深耕

～多様性が生む新たな価値と持続可能な地域づくり～



里山シンポジウム IN 東松山 2024年3月17日(日)

NPO法人自然塾丹沢ドン会 片桐 務

丹沢山ろく・名古屋(ながぬき)



はじめに

さとやまの荒廃～その復権のために

昭和30年代以降、薪炭から石油・ガスへという燃料変換が起こり、里山では、15～20年で順繰りに伐採し、萌芽更新をしていた雑木林に人の手が入らなくなった。里山はその経済的価値の多くを失い、沢筋の谷戸に先人たちが汗水たらして開拓した棚田は、土日のみ農家のサラリーマンの負担となり、いの一に耕作放棄地となった。高度経済成長期における都市部における人手不足は、農村から都市へ大量の労働人口の移動を引き起こした。全国の「さとやま＝里地・里山」は、荒廃の一途をたどり、便利さと経済を優先する大量生産・大量消費の社会が出現し、人々の生活様式が激変した。得るものあれば失ったものも。「モノ」と便利さ・効率優先の社会は行き着くところを知らず、人々の心をまどわした。

その反動は「モノから心へ」。真の豊かさとは何かというスローフードやスローライフの運動が芽生え、社会に広がった。身近な自然である「さとやま」の存在が再認識され始め、2004年、環境省の「里地里山保全再生モデル事業」で全国4か所の一つに、NPO法人自然塾丹沢ドン会が「秦野市等」として指定を受け、都市近郊の「さとやま(＝里地・里山)再生」の新たなスタートを切った。



名古屋の棚田の開墾・復元

10年近く人の手が入らず荒れ果てた名古屋の棚田。2002年6月から遠藤ユリ子さんの棚田の復田作業を開始。身の丈以上の草や灌木を刈り払い畦を付けると、7枚の棚田が甦った。周囲の藪を切り払うと小川が見えてきた。対岸の藪と竹林を切り払い、野焼きをして2枚、3枚と開墾をつづけた。さらに周囲の地権者からの期待に応え、復田作業は今もつづく。棚田の田んぼは今、大小40枚を超えた。



開墾・復田作業

名古屋の棚田の今



丹沢ドン会とは？

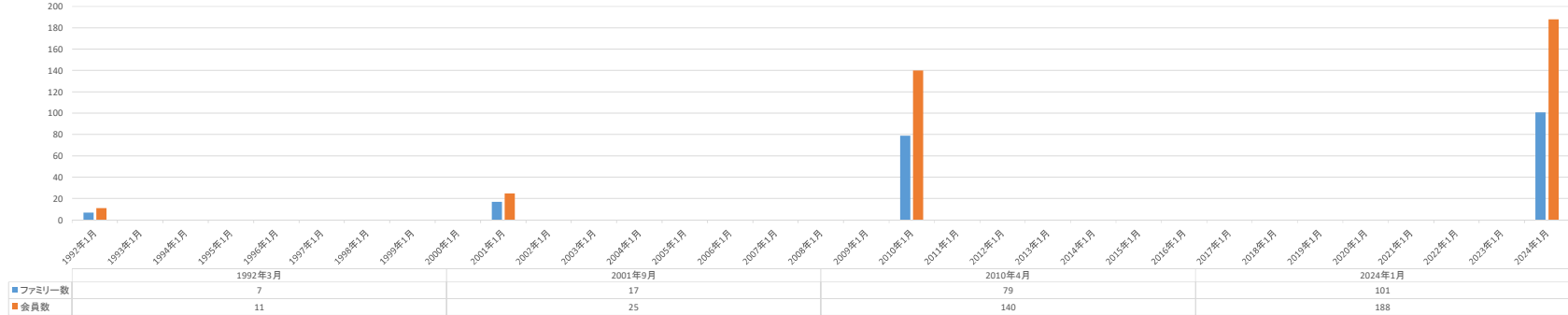


1992年3月丹沢ドン会設立、同年11月丹沢の自然と私たちの暮らしを考える第1回丹沢シンポジウム「丹沢が危ない！」を開催した。以後、シンポジウム・学習会を継続開催。2001年9月NPO法人に。2006年12月第3回「団塊サミット in 丹沢」を秦野市と協働で開催。全国のNPO団体との交流・ネットワークを結ぶ。地域・行政と連携し秦野市名古木の荒廃した棚田を復元した米づくり、そば・野菜などの安全・安心な食べものづくり活動を展開。都市と農村をむすぶ「丹沢自然塾」の開催により丹沢山ろくの伝統的な農村風景を次世代に継承する担い手を確保し、里地・里山に人の手を加えることで生き物たちが甦った。2016年10月、鷲谷いずみ東京大学名誉教授を招き「生物多様性緑陰シンポジウム」を開催。2017年4月からは、東海大学自然環境課程北野・藤吉両研究室、慶應義塾大学一ノ瀬研究室の協力を得て3年間にわたる「名古木の自然・環境総合調査」を実施しました。2017年7月に開催した、親子で自然に親しみ、自然を学ぶ「丹沢子ども自然塾」には80名余の参加者を得て、次世代継承への希望を託す。ファミリー会員制、0歳から80代まで、130家族の居場所が名古木の里にある。

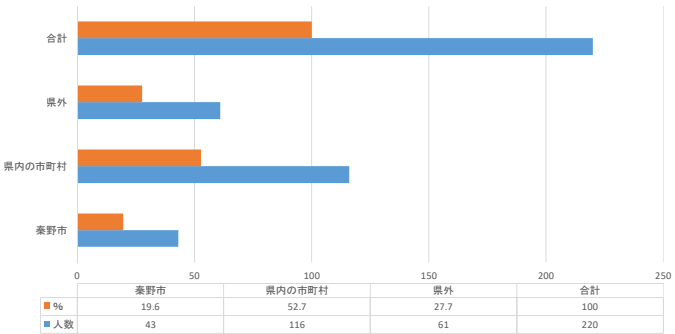


参加者の構成

ドン会会員(ファミリー)数の推移



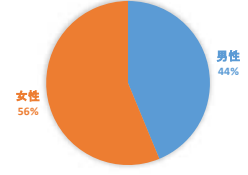
ドン会会員の居住地域別構成



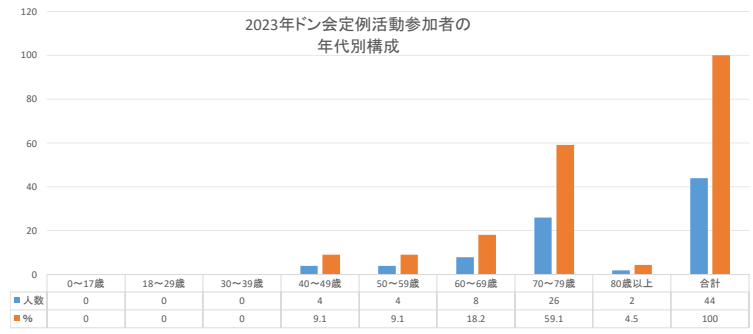
ドン会会員の男女比率



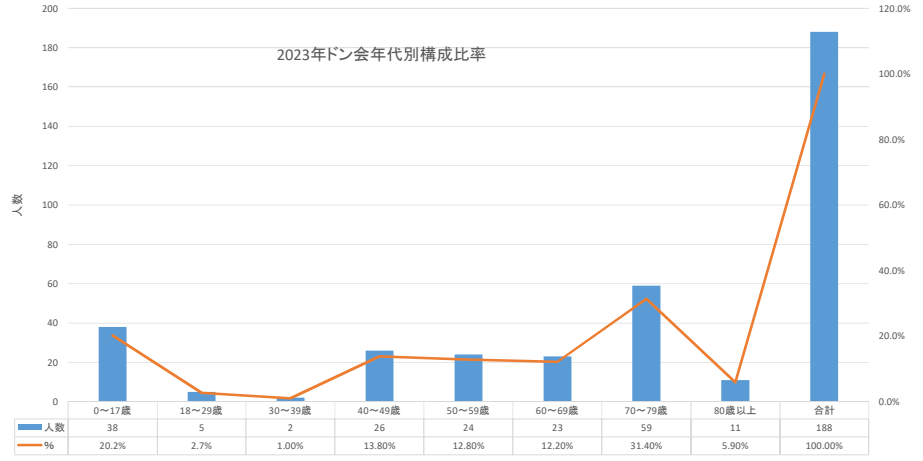
自然塾生の男女比率

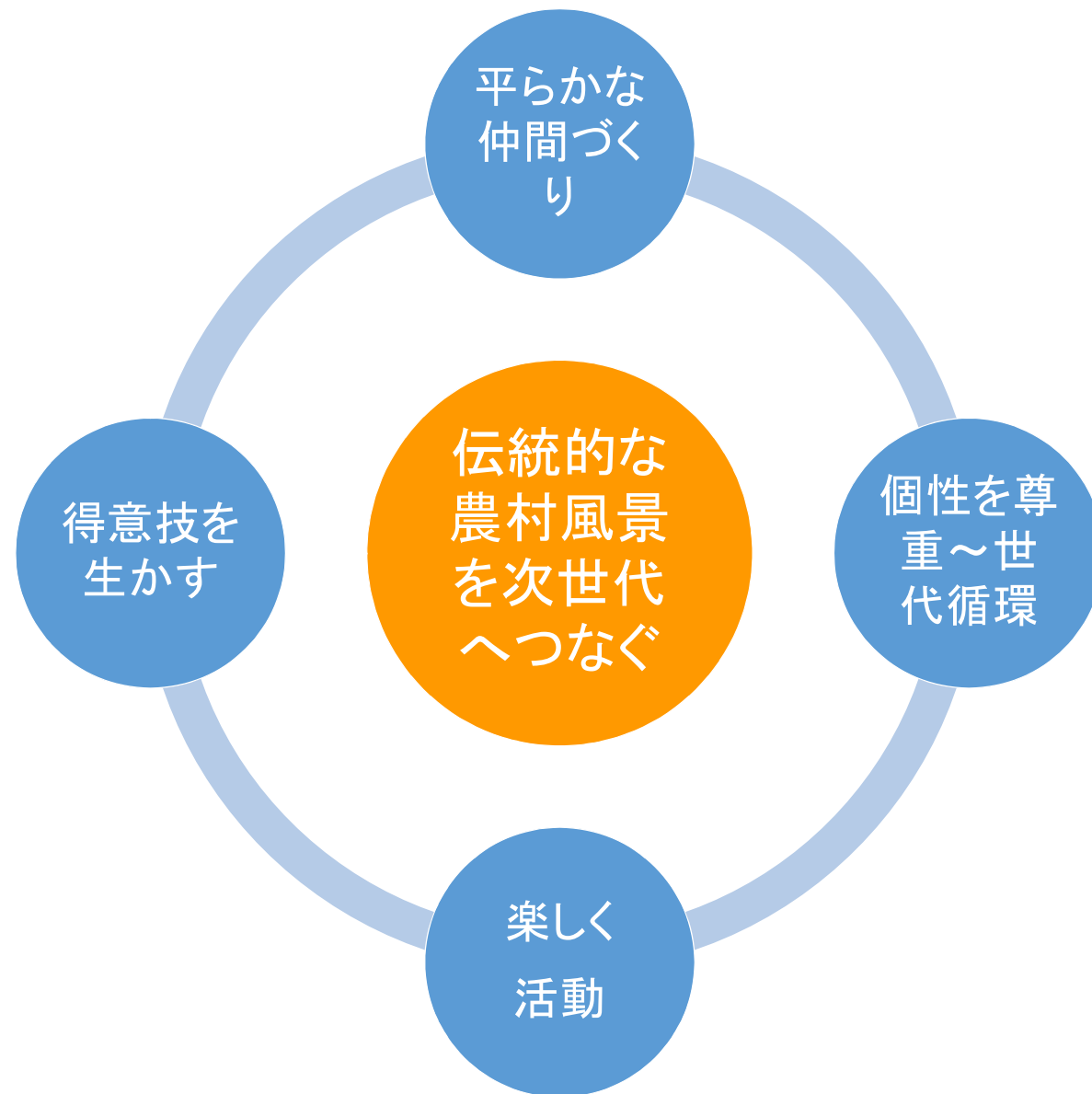


2023年ドン会定例活動参加者の年代別構成



2023年ドン会年代別構成比率





丹沢ドン会の活動





2024年「丹沢自然塾」年間スケジュール

- ① 4月13日(土)「丹沢自然塾」開講オリエンテーション・棚田の種まき教室
- ② 5月25日(土)棚田の苗取り・田植え教室
- ③ 6月22日(土)棚田の草取り・観察教室
- ④ 7月 13日(土)田んぼの生き物観察教室
(講師:北野 忠 東海大学教授)
- ⑤ 8月17日(土)そばの種まき教室
- ⑥ 9月21日(土)棚田の稲刈り教室
- ⑦ 10月 5日(土)収穫米の脱穀・精米教室
- ⑧ 11月23日(土)収穫祭(しめ縄飾りづくり・葉バッタづくり体験教室)
- ⑨ 12月14日(土)新そば・手打ち体験教室
- <2025年>
- ⑩ 2月15日(土) 里山管理教室+自然塾修了式

名古屋の棚田の復元作業や田んぼの米づくり、安全安心な野菜づくり・そば・小麦づくり、里山の管理作業の担い手をどのようにして確保したらよいか。2002年には「里山・里地グリーンサポーター「野良人」」の募集、2004年からは、前期・後期に分けて「自然塾」の塾生の募集をするなど、試行を重ねた。2006年からは、それまでの成果を踏まえ通年の「自然塾」に改編し、年10~12回のカリキュラムで塾生を募集した。新たなスタートを切った「丹沢自然塾」の募集は、新聞紙上に多数取り上げられ、神奈川県内を始め、東京・埼玉、茨城県取手など、首都圏の大都市周辺から50名余りもの参加者があった。自然・農業体験を希望する人々と名古屋のフィールドを結ぶ回路を開くことができた。以後、現在に至るまで、新聞の塾生募集記事や、ドン会のホームページによる情報発信、塾生経験者、ドン会メンバーのロコミなどにより、毎年、新たな塾生が参加している。「丹沢自然塾」を1年間体験した塾生が、名古屋に居場所を見つけたら、「丹沢ドン会」会員になることができる。



2024年丹沢自然塾 募集要項



◆国道246号から800mの山あい、秦野市名古木には都会の喧騒を忘れさせる美しい棚田があります。沢の水が流れ、ノスリが舞い、緑の風が吹き渡り、冬期湛水の田んぼでは、アカハライモリ、タイコウチ、ホトケドジョウ、ヤマアカガエルなど、かつて当たり前前に棲息していた水生生物が今も存在する生き物の楽園です。

◆人間は自然によって癒され守られています。私たちは、人間の都合を少し控え目にし、自然や生き物たちと共存し、名古木に集う仲間たちの個性を互いに尊重し合い、伝統的な農村風景である棚田や里山の保全活動に取り組みんでいます。そして次の時代を担う若い世代へ、この活動の輪を広げ継承して行きたいと願っています。

◆名古木の棚田は生き物の宝庫。3年間(2017～2020年)にわたる自然調査で、棚田とその周辺に生息する生き物の数は、植物252種、動物586種、合計838種。2021年9月、この調査結果を自然観察ハンドブック「丹沢山ろく名古木 棚田の生き物図鑑」(夢工房)として刊行しました。生物多様性に富んだ名古木の自然のいまを知るテキストです。

◆地域と人びとに支えられながら取り組み、広がりを見る丹沢ドン会の活動は、2014年度「かながわ地球環境賞・地球環境保全活動部門」を受賞し、2019年度「関東・水と緑のネットワーク」の選定を受け、2022年には農林水産省「つなぐ棚田遺産」に「名古木の棚田群」として選定。全国で271カ所・神奈川県内での唯一の認定となりました。

◆四季折々、自然と人びとの営みが豊かに息づく丹沢山ろくで、「2024年丹沢自然塾」を開催します。復元した棚田の「米づくり」、種まきから収穫・そば打ちまで体験する「そばづくり」、雑木林の管理など1年間での多彩なメニューです。田んぼの生き物観察会では、親子で水生生物に触れ、棚田の原で寝転び耳を澄ませて風の音を聞き、五感を解き放ってください。自然・農業体験を通して地域の歴史・生活や食文化・自然との付き合い方、人間と生き物たちの多様性の大切さを感じ、学びます。

「2024年丹沢自然塾」への参加をお待ちしています。 2024年3月 NPO法人自然塾丹沢ドン会

2024年「丹沢自然塾」年間スケジュール

No.	月日	曜日	テーマ	会場
①	4月13日	(土)	「丹沢自然塾」開講オリエンテーション+棚田の種蒔き教室	名古木
②	5月25日	(土)	棚田の苗取り・田植え教室	名古木
③	6月22日	(土)	棚田の草取り・観察教室	名古木
④	7月13日	(土)	田んぼの生き物観察教室(講師:東海大学教授:北野忠)	名古木
⑤	8月17日	(土)	そばの種まき教室	名古木
⑥	9月21日	(土)	棚田の稲刈り教室	名古木
⑦	10月5日	(土)	収穫米の脱穀・精米教室	名古木
⑧	11月23日	(土)	収穫祭	名古木
⑨	12月14日	(土)	新そば手打ち体験教室	両岳文庫
<2025年>				
⑩	2月15日	(土)	里山管理教室+自然塾修了式	名古木



*スケジュールは、天候その他の都合により変更する場合があります。その際は、ドン会のホームページ、会報などでお知らせします。ご確認の上、参加してください。当日の緊急連絡は右の携帯へ。昼間:090-6470-2850(金田)

◆会場の概要・交通

⑨以外は、秦野市名古木の棚田。小田急線秦野駅北口発(8:00,35) 養毛行バス9分「上原入り口」下車徒歩12分。
 ⑨は、伊勢原市上粕屋 862-1 国登録有形文化財指定・両岳文庫。小田急線伊勢原駅北口発(8:05,25,45) 大山ケーブル駅行バス6分「引」下車徒歩1分。頭巾、エプロン持参。*各会場へは、車の利用はご遠慮いただき、公共交通機関をご利用ください。

◆集合・解散

⑨以外は、秦野駅改札口8時15分集合、⑨は伊勢原駅改札口8時15分集合。その他は、現地に9時集合です。駅集合場所には、ドン会メンバーが出迎え、現地まで路線バスで移動します(バス代金は各自負担してください)。各自然塾は、各自持参の昼食をとり、現地解散:午後1～2時の予定です。

◆服装・持ち物 ①～⑦⑩は、棚田・里山の活動です。長袖、長ズボン、帽子、作業手袋、タオル、雨具持参。⑧⑨は、お椀(カップ)、箸持参、昼食不要。⑩は、エプロン、頭巾、お椀(カップ)、箸持参。新そばの試食あり、昼食不要。

◆共通持ち物 ①～⑦⑩は、昼食、飲み物持参。

◆「2023年丹沢自然塾」入会金・ボランティア保険 「2024年丹沢自然塾」の入会金は、大人1人3,000円(小・中・高校生は無料)です。万一のケガや事故に備えて、参加者はNPO活動総合保険に加入します。保険料は入会金に含まれています。また、その年の収穫量に応じて、参加者には精米した米「数kg」をお渡しします。

◆参加費 入会金のほかに、①～⑦⑨⑩の各回とも大人1人500円、⑧の収穫祭は、大人1人1,000円の参加費が必要です。参加の際に現地受付でお支払いください。

◆募集定員 25家族(先着順)

◆申し込み締め切り 2024年4月5日(金)

◆ドン会活動への無料参加 自然塾への参加者は、ドン会の活動(毎週土曜日他)にも参加できます。参加費は無料です。時には、手作り味噌汁や、畑の収穫物(新鮮野菜)などのお土産があるかもしれません。

◆申し込み

★丹沢自然塾への参加希望者は、丹沢ドン会ホームページのトップページにあるHOMEの「お問合せ」をクリックして、参加者の氏名・年齢を「お名前欄」に記入し、「お名前ふりがな」「E-mail」「郵便番号」「都道府県」「ご住所」「お電話番号」欄にも記入してください。あわせて、下段の「お問合せ」欄に「2024年丹沢自然塾の参加を申し込みます」とご記入ください。

ご家族で参加希望の場合、上記の代表者以外のお名前・ふりがな・年齢は、下段の「お問合せ」欄に記入してください。

★インターネット環境の無い方は、参加者全員の氏名・年齢・住所・電話番号を明記して、次の「申し込み先」まで、はがき、FAXでお申し込みください。

*個人情報、ドン会の催しの連絡にのみ使用いたします。

◆ドン会の活動内容の詳細は、ホームページをご覧ください。

<http://www.donkai.com>

丹沢ドン会

←検索



◆問い合わせ・申し込み先

〒257-0028 神奈川県秦野市東原200-49
 NPO法人自然塾丹沢ドン会 事務局
 FAX (0463) 83-7355
 E-mail:0112473701@com.home.ne.jp
 携帯:090-6470-2850(昼間)(金田)



復元棚田の稲刈り。竹林から竹を切り出しハザをつくり、稲を掛けて太陽の恵みいっぱい天日干しをします。脱穀・精米をして、名古木の棚田の原で開催する収穫祭で、羽釜で「ドン米」を炊き、いただきます



種まきから始めるドン会のそばづくり。畑一面の白いそばの花を観賞し、刈り取り・天日干し・製粉。終わりに国登録有形文化財・両岳文庫の「新そば手打ち体験教室」で挽き立て・打ち立て・茹で立て・香り立ての四立ての新そばを堪能します

◆「田植え」「稲刈り」の日台風や大雨等による「荒天」の際の対応について!

②⑥の開催日に「荒天」が予測される場合は、開催日を翌日の日曜日及び翌週の土曜日の両日に変更します。どちらか都合の良い日に参加してください。事務局への連絡は不要です。開催日の変更はドン会ホームページの「トップページ」及び「会員ページ」の掲示板に前日(金曜日)午後6時までに掲げます。ご確認の上、参加してください。

*参加申し込みをいただいた方には、入会金の振込口座、丹沢自然塾の会場・集合場所・交通案内、持ち物・服装などの詳細を改めて郵送にてお知らせします。ご入金をもって申し込み完了です。

名古木の棚田でお会いしましょう!

有機・無農薬 丹沢ドン会の米づくり



丹沢ドン会の復元棚田の無農薬・有機の「ドン米」の米づくりは、田んぼの苗代に種をまき苗をつくる昔ながらの農法。米づくりは3月から始まる。塩水選で重い籾を選び、水苗代で苗づくり。田んぼをクワで掘り起こし、5月下旬には手製の田植え定規を使って手植えの田植え。小川に設置した手づくりの堰堤で水位を上げ、沢水を集めて用水路に導入し、棚田の最上位に水を入れる。梅雨は命の水を供給し、夏場の水の管理が要。イノシシ・シカなどの野生動物への獣害対策に2017年には電気柵を周囲にめぐらした。ノコギリガマで稲を刈り、近くの竹林から切り出した竹でハザをつくり、稲は天日干し。脱穀した米は精米し、カマドで炊き上げた新米ご飯はこの上ない美味しさ！

ポスト棚田百選(つなぐ棚田遺産)選定記念として「名古木・棚田米」応援米を2022年11月の市民の日に限定頒布。1パック300g300円の応援金は、生物多様性に富んだ名古木の棚田を将来へ継承するための活動に活用される。



有機・無農薬の安全・安心な食べものづくりの一環として、名古屋の棚田の周辺において野菜づくり。季節を違えて、年間40種類以上の野菜を栽培。季節ごとの取れたて新鮮な野菜は、活動日の昼食のみそ汁の具材となり、自然塾生やドン会会員へのささやかなお土産に。また、8月のお盆過ぎに種まきするそばは、9月下旬に白い花を咲かせ、10月下旬には刈り取り、天日干し。12月中旬には、国登録指定文化財である伊勢原の「雨岳文庫」で手打ちそば体験教室を開催。種まきから始めるドン会のそばは、挽き立て・打ち立て・茹で立て・香り立ての4立ての美味しさ。畑では小麦の栽培も。焙烙で煎って夏場の麦茶になり、参加者ののどを潤し、パンづくりも。人は食べたもので体をつくり、楽しく汗をかきかわす言葉で心を育む。



里山管理

2002年から秦野市名古木の共有林組合の雑木林の管理作業を開始。その後、秦野市羽根にフィールドを移した。丹沢ドング会の里山の管理地は、地権者・秦野市との3者の契約による「秦野市ふれあいの森づくり事業」の一翼を担う。羽根の里山では人を寄せ付けないほどの5～6mのササ藪を4～5年かけて開墾。ヤマザクラ・モミジ・コブシや、自家採取のクヌギ・コナラなどの植樹・補植を継続中。また、6000㎡のエリアをゾーンニングし、いくつかの里山管理の手法を試行中。秦野市里山ふれあいセンターでは、木工・竹細工教室・里山学習会などを開催。名古木の棚田の周辺の里山は、数年前から手を入れ始めた。身の丈以上のササ藪を刈り払い、くさ木を間伐すると、風が通り、日の光が射し、獣害対策と共にドング会の米づくり活動にも貢献している。



羽根の里山管理作業



名古木の里山管理作業



11月下旬には、ドン会恒例の収穫祭。稲ワラを使って正月用のしめ縄飾りづくりや、子供たちは葉バッタづくり。

釜炊きご飯、搗きたてモチのほかにも、焼き鳥、豚汁や参加者の一品持ち寄りの自慢の手料理や飲み物・甘味が勢ぞろい。

会員・自然塾生・地域の方々・秦野市環境共生課など、総勢100名余りの参加者の交流・懇談が深まる。フォークローレの調べにフォークダンスの輪が広がる。



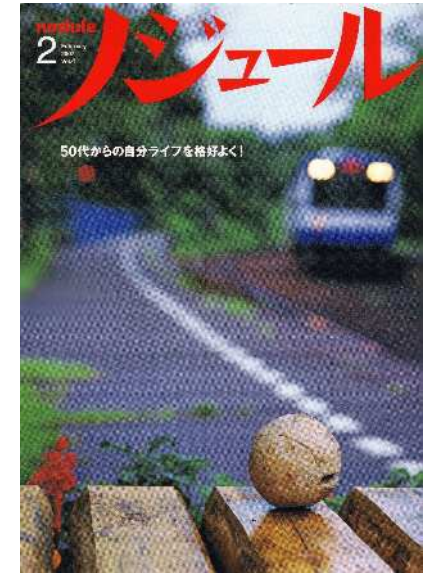
未来へつなぐ「丹沢こども自然塾」

2017年7月30日に開催した「丹沢こども自然塾」は、秦野市森林づくり課:共催、秦野市教育委員会:後援により応募者80名余りの多数となり、午前・午後の2部制に変更。慶應義塾大学一ノ瀬研究室の大学院生・学生8名が企画・当日の指導、丹沢どん会のメンバーが運営に当たった。

当日のメニューは、①森に学ぼう「自然のふしぎクイズ！」②生き物観察「田んぼや小川にいる生き物を調べてみよう！」③竹細工「竹を使って作品づくり！」④ブランコ遊び「林にある木をつかってブランコ遊びをしよう！」の4つ。午前・午後とも各3班に分かれて名古木の棚田とその周辺で自然体験。共通の体験をすることで親子のコミュニケーションが深まり、笑顔が棚田に広がる。「もっとブランコ遊びがしたい！」「来年もまた来たい」との子どもたちの声が多数寄せられた。自然体験の事前・事後の親と子どものアンケートにも、「自然を楽しむ・学ぶ」ことで、自然への関心・興味が深まった様子がうかがえた。



協働・連携



2004年2月、丹沢ドン会の「丹沢山ろくの里山里地保全事業」が、平成16年度「神奈川県ボランティア活動推進基金」対象事業に選定。審査委員長の堀田力さんは「里山保全に未来はあるのか?」と講評したが、都市と農村をむすぶ取り組みの新たな企画と実践力を評価され、以後3年間で総額550万円の助成を得て、里山保全活動の推進力となった。補助金は、耕運機・運搬機・チッパーなどの機械器具などの購入や2006年12月に秦野市と共催で開催した「第3回団塊サミット」の開催にも寄与し、NPO法人化直後のドン会活動の事業展開、情報発信に力となった。



1992年発足の丹沢ドン会は、年1回開催の「丹沢シンポジウム」で、丹沢の自然と私たちの暮らしのあり方を考え続けてきた。一方、97年からは菩提でそばづくりに取り組み、99年からは名古屋で小麦づくり、2000年からは名古屋の棚田で地元農家の指導を受けながら東海大学室田教室の学生と米づくりを始めた。**01年に神奈川県よりNPOの認証を得て**、02年からは名古屋の共有林で雑木林の管理作業に組み込み、名古屋の棚田の復元活動を開始した。翌03年から復田した田んぼで米づくりを開始。これまでのドン会活動に対して、03年11月、第16回「神奈川県地域社会事業賞」（神奈川県新聞社・同文化厚生事業団）と第18回「手づくり郷土賞（地域活動部門）」（国土交通省）をダブル受賞した。

さらに**2004年2月**には、これまでの丹沢山ろくにおける丹沢ドン会の里地里山保全事業が、「平成16年度神奈川県ボランティア活動推進基金21」に**選定**された。審査委員長の堀田力さんからは、「里山の保全活動に未来はあるのか？」と講評されながらも、都市と農村をむすぶ取り組みの新たな企画と実践力を評価され、以後3年間の助成を得て、里山保全活動の推進力となった。

同年7月、環境省「里地里山保全再生モデル事業」全国4か所の一つ「秦野市等」として選定され、都市近郊の里山の身近な自然の未来を託された。秦野市内の活動団体は30余り。「**はだの里山保全再生活動団体等連絡協議会**」を組織し、連携を図りながら丹沢山ろくの里山保全活動を行っている。丹沢ドン会では、「丹沢自然塾」の開催により、都市から里地・里山保全再生活動の担い手と呼び込み、さまざまなメニューを用意して20年余り活動を続けてきた。雑木林の管理、棚田の復元による米づくり、そば・小麦や野菜づくりなど、安全安心の食べものづくりにより、参加者のそれぞれの居場所をつくり上げた。

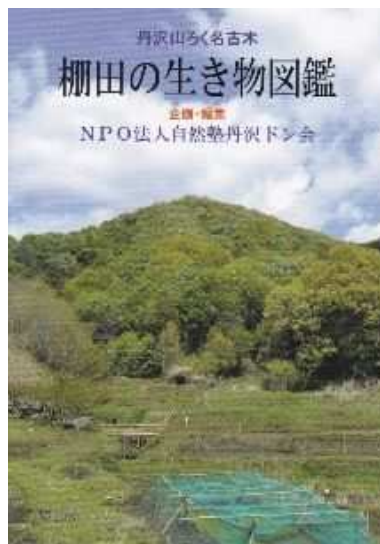


名古屋の棚田の自然調査・観察会～東海大・慶応大と連携～

2017年4月から3か年にわたり実施した秦野市名古屋の自然調査は、2019年8月に最終報告が整いました。東海大学人間環境学科自然環境課程の北野忠・藤吉正明両研究室と、慶應義塾大学一ノ瀬友博研究室の調査により、**植物252種、動物(クモなどを除く)586種、合計838種の生き物**が確認されました。丹沢ドンのフィールドとその周辺という限られたエリアにもかかわらず、これほど多数の生き物が生息する名古屋の自然の豊かさを実感する成果です。

同時に、この地域で20年余にわたり丹沢ドロン会が取り組んできた棚田の復元活動と、無農薬・有機の米づくりを始めとした食べものづくりが果たしてきた役割の大きさを再確認。里地・里山に人の手が入ることで豊かな自然が甦ったのです。名古屋の自然調査の成果は、『**丹沢山ろく名古屋 棚田の生き物図鑑**』(夢工房)として、2021年9月に刊行しました。図鑑は、子どもたちや広く市民に身近な自然の大切さを知るテキストとして、あるいは自然観察ハンドブックとして活用してもらうために、秦野市内の小・中・高の全校を含む、市内の公共施設50か所に各2冊、合計100冊を献本しました。

私たちの安全・安心な食べものづくりのあゆみと、生き物たちの多様性との共存は、名古屋に限らず、全国共通の課題です。また、このような**伝統的な農村風景を次の世代へ引き継ぐ**ことは、いまに生きる私たちが未来から託されたテーマでもあります。名古屋の自然の豊かさと、丹沢ドロン会の棚田の復元・米づくり活動の関わりを広く市内外の人びとや子どもたちへ伝えたいと思います。



農林水産省「つなぐ棚田遺産」に選定！

「名古屋の棚田群」

2022年3月～全国271か所、神奈川県内唯一～



↑関野光治さんの棚田

←丹沢ドン会のフィールド

名古屋の棚田群

1999年に選定された「棚田百選」全国134地区は、認定から20年以上を経過して、担い手の減少や農家の高齢化により従来のような保全活動が難しくなり棚田の荒廃の危機に直面。そこで、2022年3月、農林水産省では、棚田地域の振興に関する取り組みを積極的に評価し、地域の活性化や棚田の有する多面的な機能に対する国民の理解と協力を得ることを目的として、優良な棚田を「つなぐ棚田遺産」として全国で271か所認定した。

神奈川県内で唯一認定された「名古屋の棚田群」は、NPO法人自然塾丹沢ドン会と地域の農業者の連携のもと、棚田の維持や「丹沢自然塾」による農業体験、自然体験など、都市住民等との交流事業を通じて、生物多様性に富んだ農村の原風景を次世代へつなぐ活動を実施している。



フレイル予防とドン会活動 ～実践していた「栄養・運動・社会参加」～

・フレイル簡易チェック 2023年9月16日(土)、丹沢ドン会の定例活動日に秦野市名古木の棚田で、東京大学・イオン環境財団の共同研究「フレイル予防と里山活動」の実証調査を実施しました。東京大学・イオン環境財団に加えて秦野市高齢介護課・森林ふれあい課のみなさんが来場し「**フレイルとは何か、健康寿命に大切な3つの要素**」などについて解説の後、この日の参加者30名余りのドン会メンバーの「フレイル簡易チェック」です。

・年齢を感じさせないドン会活動 チェックの結果は、全部「青」の人が4名。これまでの調査からは考えられない数値だといいます。チェックの前に行った握力検査でも、男女ともに年齢を感じさせない数値が続出。詳細は東京大学チームのデータ解析・比較検討を待ちますが、ドン会メンバーは、これまでのドン会活動の成果を実感しました。30年余りの「里地・里山の保全・再生活動」により、かつて当たり前のように生息していた生き物たちが帰って来ました。同時に、**名古木の3つの間**である「**時間・空間・仲間**」を共有し、いい汗をかき楽しみながらの無農薬の米・野菜・小麦・そばづくり活動を通して安全・安心な食べものづくりを実践してきました。

・健康長寿のヒント 図らずも「**栄養・運動・社会参加**」という**フレイル予防の3要素**を意識しないで実践してきたこれまでのドン会活動が、人生百年時代の健康長寿のヒントになりそうです。「丹沢自然塾」の開催により、都市と農村をむすび、子育て世代ファミリーの自然・農業体験により親と子のコミュニケーションを深め、シニア世代から未来を担う子どもまでの世代間の循環を促したいと思います。丹沢山ろくの里山で自然循環と世代循環のネットワークが広がることを願っています。

・丹沢ドン会の連絡先：秦野市東田原200-49
☎090-6470-2850(金田)昼間のみ
HPはQRコードから



フレイルチェック・
握力測定



イレブン・チェック



フレイル予防でいきいき健康生活！ ～丹沢ドン会の実践活動～

口を使う

おいしく食べる

名古屋の棚田米40数種類の
新鮮取れたて野菜・お土産

お楽しく語らう

仲間とコミュニケーション
自然塾生・子どもたちと
コミュニケーション

NPO

活動に参加

伝統的な農村風景を保全・再生
多様な生き物たちと人間の共生
地域・行政と協働する

フレイル 予防の3要素

栄養・運動

社会参加

プラス

名古屋の居場
所づくり

体を動かす

電車・バス・徒歩で

名古屋・自然塾へ

名古屋の棚田で

無農薬の米づくり・野菜づくり・そばづくり

羽根・名古屋のさとやまで

植樹・下草刈り・

間伐・枝打ち

居場所づくり

一人ひとりのやりたいこと探し

新たな出会い、得意技を生かす

個性を尊重し、平らかな関係

互いを尊敬し合える仲間づくり

暮らし方・生き方を考える農業体験

心身をリフレッシュする棚田空間

SDGsを考え実践

名古屋の3つの間～時間・空間・仲間～

NPO法人自然塾丹沢ドン会 連絡先: 秦野市東田原200-49 ☎090-3546-1583

秦野市「ふれあいの森づくり事業」

里山の保全再生に早くから取り組み始めた秦野市は、2004年、環境省の「里山里山保全再生モデル事業」全国で4か所の一つとして「秦野市等」として選定された。それを機に、「里山保全再生活動団体等連絡協議会」を立ち上げ、活動団体のネットワークと情報の共有を図った。同時に森林整備活動に対し「ふれあいの森づくり事業補助金」制度を立ち上げ、活動団体への支援を行った。制度の根幹は、地権者と活動団体に秦野市が加わり、3者で荒廃した里山の管理・利用契約を結び、里山の保全再生を図ること。地権者は、行政が介在することで安心して荒廃地の再生を活動団体に託す。活動団体は、市の紹介により活動地を確保し、管理面積に応じて助成金を得る。行政は、両者をつなぎ経済効率を果たしながら里山の保全再生事業を達成できる。まさにウインウインの関係づくり。現在、30数団体が丹沢山ろくで活動している。



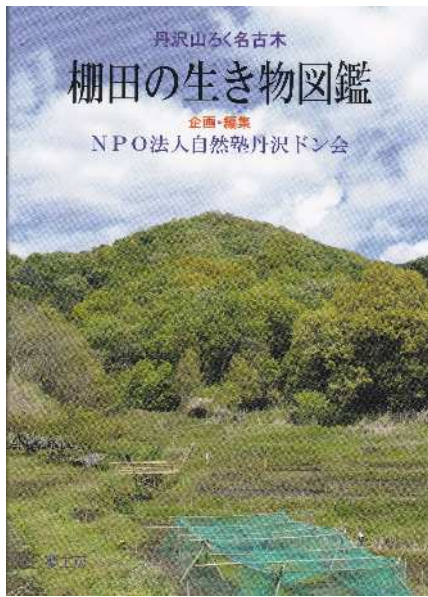
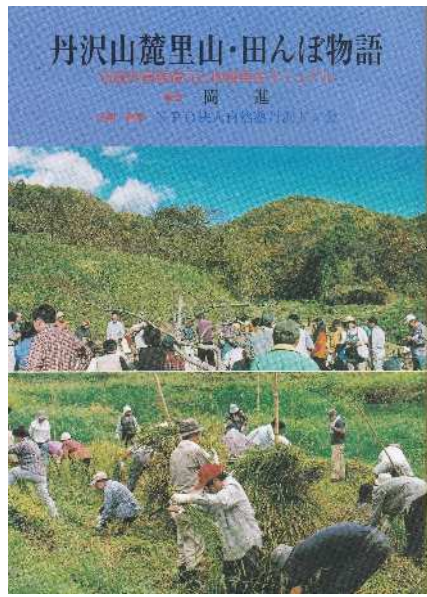
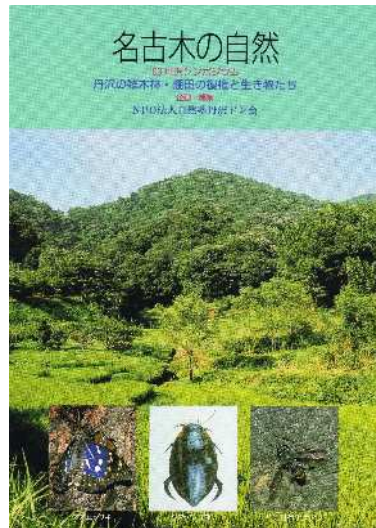
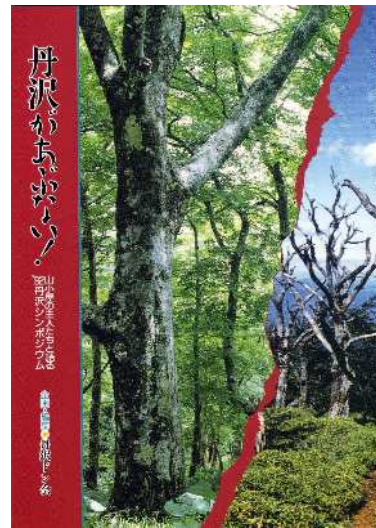
護岸崩落の補修～秦野市とドン会の協働～

地球温暖化の影響を受け、近年の異常気象はそれが通常にさえ思われます。2020年7月3日、大雨により、丹沢ドン会の棚田に水を引き入れている小さな沢に濁流が押し寄せ、棚田周縁の護岸が大きく崩れました。そのまま放置すれば、棚田の米づくりに被害が及びます。秦野市環境共生課に相談すると、即、農業振興課に橋渡し。現地を視察・確認した担当職員は、補修に必要な資材の提供を生産組合を通して行いたいと申し出ました。無償提供の資材を活用して、崩落個所の復旧作業はドン会メンバーが担いました。行政が資材、NPOが労力を提供して、この自然災害を早期に乗り越えることができました。官民協働の実践です。



情報発信

丹沢ドン会の出版活動



丹沢ドン会の情報発信 2022年

これまでのドン会30年の活動は、秦野市「広報はだの」6月15日号に特集「この景色 未来への贈り物」(カラー2ページ)、一般財団法人日本緑化センター情報紙「グリーンエージ」2022年8・9合併号に「棚田の再生と米づくり～名古屋の棚田と生きものたちを未来へ」(カラー3.5ページ)、NPO法人棚田ネットワーク会報誌「棚田に吹く風」2022年秋号に「丹沢山麓の棚田」(カラー3ページ)として掲載されました。



一般社団法人日本緑化センター「GreenAge」2022年8・9合併号



秦野市広報「はだの」
2022年6月15日



認定NPO法人棚田ネットワーク
「棚田に吹く風」
2022年秋号
№125

「さんぽの達人」
2021年



TVK ニュースリンクで～特集：名古屋の米づくり～

●つなぐ棚田遺産選定と名古屋棚田応援米

2022年3月、ドン会30周年の節目の年に、農林水産省の「ポスト棚田百選」である「つなぐ棚田遺産」に「名古屋の棚田群」として選定された。全国で271か所、神奈川県内では唯一。選定を記念して秦野市市民の日に「名古屋・棚田米」を1パック300g、応援金300円で頒布。市内の栗原米店・カフェ「いがらし」においても好評頒布した。

●雑誌・テレビの取材

2022年は「丹沢自然塾」の塾生募集を再開し、30ファミリー50名近い大人と子どもたちが、米づくりを中心とした年10回の農業・自然体験に参加した。塩水選から始まる名古屋の米づくり。TVK「テレビかながわ」は、6月の田植えから取材をつづけ、11月30日9時半からのニュースリンクで特集で名古屋の棚田を9分にわたり放映した。ドン会30年にわたる活動の意味とこれからをコンパクトにまとめた。下のQRコードからYouTubeを視聴することができる。

●ドン会40年に向けて

空に鳥、田んぼに水生生物、野に植物や昆虫などが共存する秦野市名古屋の棚田の桃源郷には、ファミリー会員制のもと、1歳から80代までの多様な年代層の130家族の居場所がある。生物多様性に富んだ名古屋の棚田・伝統的な農村風景を未来の子どもたちへつなぐ丹沢ドン会の新たな活動が始まる。



「さとやま」の 新たな価値創造と地域づくり

世界に向けて日本が発信した「さとやまイニシャティブ」は、地球温暖化対策や脱炭素社会を目指して世界に貢献する。環境省が進める「30 by 30」は、地球の陸域・海域の30%の生物多様性の保全を目指す。そのような世界の大きな流れの中で、日本の里地・里山＝「さとやま」の存在は欠かせない。奥山の山頂から中腹を経て山麓の里山・里地、さらに人々が生活を営む都市へと連なり、河川を経て海へとつづく自然の循環。そのどこか一部でも滞れば、自然の循環は途絶える。「さとやま」は、これまでどのように人間と関わり、どのような価値を持ってきたのか。人口減少、高齢社会の日本において、これまでのような経済成長は望めない。経済の拡大に代わる価値観、新たな価値創造が求められる。

阪神淡路大震災、東北大地震、能登半島地震による人とモノの甚大な被害は目を覆うばかり。災害の爪痕は、大地に刻まれている。いつ来るかもしれない災害にどのように対応したらよいか。「さとやま」は、安全・安心な食べものづくりと、人々の交流の場であり、被災時や非常時の水と食料の安全弁となる。身近な自然の中で安らぎ、自然体験、農業体験を通して親子のコミュニケーションを重ね、世代間の交流を図る。スローフード、スローライフを志向する若い世代が、それぞれの居場所で地域に根を張り活動をつづけている。「さとやま」で気付いた自然と人間との付き合い方、人間の都合を少し控えめに、人が手を加えることで保全・再生される自然がある。

平らかな関係で、お互いの個性を尊重し合いながら仲間づくり、これまで育んだ得意技を持ち寄りながら「さとやまを深く耕す」。それぞれの居場所があり、誰一人として取りこぼさない SDGs の実践。「さとやま」に通い、安全・安心な食べものづくり、美味しい食材、同じ釜の飯を食べ、楽しく語らう。地域社会とつながり、ほんの少し世のため人のために役立つ。「さとやま」は、加齢による心身の虚弱化(フレイル)を予防し、健康寿命を保つ。「さとやま」で身近な自然の大切さを学び、「さとやま」を深く耕し、「さとやま」を暮らしに生かす。それは、持続可能な地域づくりへの第一歩である。



「さとやま」深耕で 持続可能な地域づくり

さとやま
 commons
 (資源・宝物)
 の再発見

さとやま
 の新たな
 価値創造

生物多様
 性の保全
 再生

- ・フィールドをひらく
- ・人を呼び込む
- ・楽しい活動が継続の力
- ・情報発信で人と場のマッチング
- ・地域・行政と協働・連携
- ・活動資金の手当て
- ・担い手づくりと世代循環
- ・未来の子どもたちへつなぐ

安全安心
 な食べもの
 づくり

さとやま
 深耕

身近な自
 然と付き合
 う

親子の学
 び・コミュニ
 ケーション

スロー
 フード～ス
 ローライフ

仲間づく
 り・居場所
 づくり

フレイル
 予防

東松山の「さとやま」のいまと未来



東松山市の豊かな自然は、市民生活に安らぎと潤い、さまざまな恵みをもたらしている。しかし、地名に現われた意味を探り、記録をたどれば、たゆまない人と川と水と大地との闘いの歴史であった。

現地案内された「松風公園」は、都市化による開発の中にあって、住宅地隣接の生物多様性に富んだ谷戸空間を保全し、「関東・緑と水のネットワーク拠点(百選)」の選定地。しかし、大径木化したクヌギ・コナラなどの斜面地の林は、ナラ枯れや鉄分の流入による水質への影響をどのように克服するかという課題もある。

比企自然学校は、古民家の再生・活用による活動拠点において、川の学校・森の学校・大人の部活の活動を通して「こどもの元気な声が聞こえる地域づくり」を目指している。

児(ちご)沢探検隊は、田んぼの米づくりを通して食育と田んぼの生き物調査を継続。トウキョウサンショウウオ保全のための活動も。多様な生き物たちが生息する田んぼを維持している。

東松山の豊かな自然と生物多様性に富んだ里山を未来に引き継ぐためには何が大切か、市民と行政の「協働ですすめる環境まちづくり」の取り組み、市民プロジェクトの今後が期待される。



名古屋の春



秦野市名古屋のさとやまに、水ぬるむ春がやって来た。幾千万匹のオタマジャクシがカエルに成長し、水生生物たちが小川や田んぼをわがもの顔に泳ぎ回る。青空には猛禽類のノスリが舞い、生きとし生ける者たちの命の歌声が田んぼに響き渡る。

この冬の寒仕事では、今年も一枚もう一枚と荒廃地の復田作業や崩落した小川の護岸の補修工事。田んぼの法面は野焼きし、竹林の整備で出た真竹や孟宗竹を燃やした竹ずみを田んぼに播く。水をはった田んぼではもうすぐ田起こしが始まる。今年の米づくりの始まりだ。



生物多様性に富んだ名古屋の棚田の風景を 未来の子どもたちへ！



今年も「丹沢自然塾」の募集が始まった。朝日新聞、神奈川新聞、東京新聞の記者たちがドン会の活動に寄り添い塾生募集の記事を書いてくれると言う。名古屋の「さとやま」に集う0歳から80代の人たち。第二の人生をかけたシニアたちが、子育て世代のファミリーを迎えて自然・農業体験の手ほどきをし、語り合う。生き物たちとふれ合い、自然との付き合い方を五感で学ぶ。
「合い」は「愛」に通じる。人と生き物とふれ合い、命をつなぐ。

生物多様性に富んだ名古屋の棚田を未来の子どもたちに伝える丹沢ドン会の活動は10年、20年先を目標にパワーを蓄え、これからもつづく。